

<ワークショップ報告>

①コロナ禍での初年次教育を振り返り、これからの初年次教育をリデザインする

担当者： 山田剛史(関西大学)

概要： 初年次教育がほぼ全ての大学で取り組まれる教育プログラムとなってそれなりの年数が経っている。この間、高大接続改革が進み、入学者の学習履歴にも変化が生じている。SSHやSGHの指定を受けた学校の生徒以外にも、新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」(≒AL)や「総合的な探究の時間」の実現が目指される中で、多くの生徒(大学入学者)が日常的にALや中長期的な探究活動を経験している。このことは大学の初年次教育を見直す大きな変化の1つである。今ひとつの大きな変化は此度のコロナ禍である。コロナ禍において、緊急対応型遠隔授業が一斉導入され、全ての教員がリアルタイム型やオンデマンド型など多種多様な遠隔授業を経験し、その効果や可能性について考えさせられることとなった。同時に、特に初年次学生の孤独感やうつ症状などメンタルヘルスの問題も浮上し、新たな学生支援・学習支援の展開や対面授業の価値の再認識にも繋がった。本ワークショップは、以下のような形で進めた。

1. イントロダクションとして、上記の問題背景とコロナ禍での初年次教育・初年次生の実態(会員調査・学生調査)を紹介した。
2. ワーク1として、グループに分かれて(ブレイクアウトルームを利用して)、共通のテンプレート(科目、対象、テーマ、目標、方法、共通性、体制など7つの観点)に基づき、コロナ禍の初年次教育実践の共有を行った。
3. ワーク2として、ワーク1で共有した初年次教育の実践を踏まえて、その中で実際に行った工夫ややってみて良かったこと、逆に、難しかったことやうまくいかなかったことについて、各グループで話し合ってもらい、その結果をGoogle Jamboardに入力してもらい、全体でも共有できるようにした。
4. ワーク3として、コロナ禍で得られたことを踏まえて、これからの初年次教育を発展させるためにどのような取組が考えられるかについて協議し、アイデア等をGoogle スライドにまとめてもらった。

なお、本ワークショップは大会1日目と2日目の両日で開催した。1日目は2グループ、2日目は3グループ編成で、それぞれ積極的な意見交換、情報共有が行われた。

キーワード： 高大接続、新学習指導要領、コロナ禍の遠隔授業、初年次教育のリデザイン

②初年次教育×オンライン×キャンパス

担当者：田中 岳(岡山大学)

担当者：立石慎治(筑波大学)

担当者：宮浦 崇(九州工業大学)

ICT技術協力：大嶋康裕(崇城大学)

概要：コロナ禍の影響を受けた2020年以降、大学等の様相は一変した。授業、入試、正課外活動など、地域による差はあったものの、オンラインを中心としたリモート化や、延期、代替措置など、対応に苦慮した各機関の状況は今も続いている。しかしながら、そうした困難によって、これまでにない高等教育へと前向きな変化が進んだというコメントも耳にしてきた。本ワークショップのねらいは、2020年を振り返り、それらを踏まえて、これからの初年次教育について考えてみようとするのであった。「ハビトゥスによってすっかりコロナ禍以前に舞い戻る」「否、DXはじめ進歩的な未来へと進む」といった紋切り型でもなく、2020年度に初年次だった学生のことを思いながら、この時期だからこそ考えられる初年次教育の先行きについて知恵を出し合うことが眼目とされたのである。当日は、デボノ博士の6色ハット発想法を用いながら、思考を拡大する機会づくりをオンライン上で展開した。その検討内容を全体共有するため、『IdeaBoardz』というツールが活用された。なお、プログラムの冒頭には、次のような目標、役割、過程を提示し、構造的なグループワークを進めた。

[目標] ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、それぞれ課題解決への道筋を自身の言葉で語ることができるようになる。[役割] 担当者は参加者間の相互作用を活性化する進行に努めますので、御参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。[過程] ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に参加者全員での共有までを計画しています。

キーワード：コロナ禍、オンライン、キャンパス、ハビトゥス、DX

③オンライン授業で活用できる「演劇的手法」

担当者：蓮 行(京都大学)

概要：演劇は、複数分野の芸術の混交により創造される総合芸術であり、「場と情報と身体芸術」と言うこともできる。そのエッセンスは、身体表現を伴うワークや、ロールプレイ、短時間の演劇創作等の形で学習環境に導入することができる。演劇的手法を授業に取り入れることで、学習者の活動性を高めるだけでなく、属性や専門性の異なる学習者同士がそれらの差異を超えていかに集合知をつくるか、という合意形成のプロセスを学習者に体験させることができる。そのプロセスは、社会活動の縮図でもある。ただし、このような演劇的手法をオンライン授業で実現することは可能なのだろうか？本ワー

クシヨップでは、企画者が COVID-19 拡大以降の2年間で進めてきたオンライン授業を実際に実践し、大学関係者と共に議論することをねらいとしていた。当日は13名の参加があり、Zoom上で演劇的手法によるワークショップを実践した後、グループディスカッションを行った。ワークショップは、(1) いいですね〜ゲーム、(2) 市民健康相談の2種類を実践した。参加者からは、「いいですね〜ゲームは安心・安全の場づくりとして学生に使ってみたい」、「役を作る、なり切ることで、日常とは異なる考えや気持ちになった」などのコメントが寄せられた。

キーワード： 演劇的手法、ロールプレイ、オンライン授業、表現活動

④ 2030年の初年次教育を構想する —初年次教育のパラダイム転換を目指して—

担当者： 成田秀夫(大正大学)
山本啓一(北陸大学)
吉村充功(日本文理大学)
菊地滋夫(明星大学)
垣花 渉(石川県立看護大学)

概要： コロナ禍の収束は予断を許さない状況であるが、現在の大学教育においてはアフター・コロナを見すえつつ、Society5.0時代に向けた転換が迫られている。その影響は、初年次教育にも及んでいる。令和2年1月22日に公表された「教学マネジメント指針」を踏まえると、今後の初年次教育については、大学のカリキュラム全体と有機的に連動して再構築することが求められている。今回のワークショップでは、初年次教育をめぐる5つのテーマについて企画者が概説し、参加者がワールドカフェの要領で2つのテーマについて意見交換した後、全体で2030年の初年次教育について討議した。テーマと担当者は次に示した通りである。

1. アフター・コロナと Society5.0 (菊地滋夫)
2. 自律的学修者と学生中心の授業 (垣花 渉)
3. 初年次から始まる地域連携・社会接続 (吉村充功)
4. 初年次教育・教養教育・キャリア教育の統合 (成田秀夫)
5. カリキュラム・マネジメント (山本啓一)

菊地の提案では大学教育が置かれている全体状況を、未来を透視した視点からとらえ、垣花の提案ではそうした状況を生きていく学生を育てるパラダイム転換について議論された。こうした全体的な視点を踏まえ、吉村の提案では大学教育が地域や社会と連携する必要性について、成田の提案では初年次教育が教養教育・キャリア教育と統合した共通教育として行われる必要性について、最後に山本の提案においてこうした改革を担うカリキュラム・マネジメントのあり方について活発に議論された。ただ、今回のワークショップはこうした課題の全体像を確認することに重きを置いたため、各論を深める

ことが今後の課題となっている。

キーワード : 教学マネジメント, 学修者中心, 授業設計, 地域連携, 統合型教養教育, アフター・コロナ

⑤ LTD 話し合い学習法—基礎と応用—

担当者 : 安永悟 (久留米大学)

概要 : 本ワークショップの目的は LTD を理解し, その可能性を知ることであった。ワークショップの構成は次の通りであった。

- | | | |
|----------------|-------------|---------------|
| 1. 協同学習の基礎基本 | (1) 自己紹介 | (2) 基本技法 |
| | (3) 協同の精神 | |
| 2. LTD 話し合い学習法 | (1) LTD の概要 | (2) LTD 過程プラン |
| 3. LTD 授業モデル | (1) モデル図 | (2) 学習効果 |
| | (3) 実践例 | |

本ワークショップは協同学習の技法を用いて展開した。まず3人または4人でグループを編成した。そして協同学習の技法である「ラウンドロビン」を用いた自己紹介を手がかりに, 協同学習の基礎基本を確認した。そのうえで LTD 過程プランを中心に説明をおこない, 質疑応答をおこなった。最後に, LTD 授業モデルおよび本モデルに沿った実践例を紹介し, LTD を活用した授業づくりについて意見交換した。なお, 本ワークショップは安永 (2019)「授業を活性化する LTD」(医学書院)の内容に準拠して計画・実践した。

キーワード : 協同学習, LTD 授業モデル, アクティブラーニング